

平成 26 年度「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」（共同  
利用型）成果報告

「アムダリヤのカスピ海への転流計画から見た帝政ロシアの中央アジア統治」

塩谷哲史（筑波大学人文社会系助教）

本研究の目的は、18 世紀初頭のピョートル 1 世の時代から 1910 年代にかけてロシア帝  
国が中央アジアにおいて追求した、アムダリヤのカスピ海への転流実現を目指した諸計画  
と、それらの計画の実施が中央アジア現地社会に与えた影響を明らかにし、ロシア帝国の  
中央アジア統治の性格を再検討することであった。

本年度実施したセンターでの研究活動においては、『トルキスタン集成』（スラブ研究  
センター所蔵）などに所収された、1870 年代以降の転流計画立案・実施時期における当問  
題をめぐる論説を閲覧した。ここから当時の行政官ならびに技師たちが、同時代のロシア  
帝国外での大規模灌漑事業の情報に影響を受け、しばしば中央アジア現地での調査の成果  
を看過していたことが明らかになってきた。また「19 世紀末-20 世紀初頭の中央アジア新聞  
集成」コレクション所収の新聞記事を閲覧し、転流をはじめとした中央アジアにおける灌漑開  
発をめぐる現地ムスリムの見解、議論についての情報を収集した。さらにセンターの地田徹朗  
氏の紹介で、トゥルガンベク・アッラニヤゾフ氏の報告（「マングシュラク（カザフスタン）、  
カラクーム（トルクメニスタン）における反ソ暴動（1931 年 4 月～9 月）」）に参加する機会  
を得た。氏の報告は、対象時期こそソ連初期であるが、まさに帝政期から本格化した転流計画  
の舞台となった地域を対象とした報告であったため、私は数々の有益な情報を得ることができ  
た。

本研究の成果として、転流計画の現地社会への影響を検討した英語論文（"Povorot and the  
Khanate of Khiva: a new canal and the birth of ethnic conflict in the Khorazm oasis, 1870s-1890s,"  
*Central Asian Survey*, 33-2, 2014, pp. 232-245）を刊行できた。また本研究課題の基礎となる  
研究成果（『中央アジア灌漑史序説—ラウザーン運河とヒヴァ・ハン国の興亡』風響社、  
2014 年）に対して、第 4 回地域研究コンソーシアム賞登竜賞および平成 26 年度筑波大学  
若手教員奨励賞を受賞した。本研究課題への支援ならびに滞在中の図書室およびセンター  
事務室の方々の様々な面でのご助力に対し、ここに深く謝意を表したい。